
ルッカーとつぼみの島ポーチカ

石室悠

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ルウカーとつぼみの島ポーチカ

【Nコード】

N0753C

【作者名】

石室悠

【あらすじ】

自分に自信の無いルウカーは、花が大好きな少女。ある日ルウカーはお母さんからお使いを頼まれて、町に買い物に行きますが、帰り道を間違えて、花の咲かない島ポーチカにたどり着きました。そこでルウカーは花の妖精と出会います。

昔々、まだ世界が妖精や精霊達の不思議な国と繋がり、世界のそこかしこで見られた頃のお話です。

とある町外れに、ルウカーという少女が、お母さんと一緒に住んでいました。

ルウカーは子供の頃から、あばたやそばかすが気になって、外に出ようとしませんでした。人に会うと、馬鹿にされると思い、ルウカーは滅多に家から出ず、人に会わないようにしていました。そしてそんな自分を「何も出来ないダメな子」と責めていました。

そんなルウカーにも心休まる時間が有りました。それは、花を見ている時です。

ルウカーのお母さんは、絵を描く仕事をしていたので、時々腕いっぱいの花を買って来て飾り付けるのです。ルウカーは植物が好きでしたが、特に花がとても好きでした。色とりどりの花を見ていると心が和み、花に包まれていると自分まで美しくなった気がしました。

けれど鏡を覗くと、そこにはいつもの冴えない顔をした自分が居て、ルウカーはいつもガツカリしました。

いつか自分も花のように、綺麗に咲けば良いのに、とルウカーは夢見ていました。

ある日、ルウカーはおつかいを頼まれました。ルウカーは嫌がりましたが、お母さんが怒りそうになったので、仕方無く家を出ました。お母さんは怒ると、とてもおっかないのです。お母さんは自分が上手く絵を描けないと、ルウカーを何かにつけて叱るような人でした。普段は優しいのに、絵の事になると怖くなるのがルウカーのお母さんでした。

ルウカーは画材を買って来るように言われ、渋谷町への道を行きました。ルウカーにはそうするしか無かったのです。

春が訪れていました。町に続く土手の道は、スミレやレンゲ、水仙やマーガレット、チューリップにサクラ草……たくさんの花々でいっぱいでした。ルウカーは少しだけ気が軽くなりました。

と、ルウカーは花を見ていて、川の向こうに島が有る事にも気付きました。今までずっと俯いて歩いていたので気付きませんでした。川の中にポツンと、寂しい島がありました。その島は「ポーチカ」と呼ばれていて、どんなに四季が変わっても、花が一つも咲かない島なのでした。

ルウカーは「まるで私みたいな島だわ」と嫌な顔をして、町に急ぎました。

町の真ん中の画材屋さんには、ルウカーはコソコソと入りました。

画用紙の束と、絵の具を買うと、ルウカーは足早に帰り始めました。

「あっ」

ルウカーはいつも通る近道で、子供達が遊んでいるのを見て心臓が飛び出そうになりました。

「気付かれたら、きっと苛められるわ」

ルウカーはしばらく様子を伺っていましたが、子供達がそこを離れそうに無いので、仕方無く、歩いた事の無い道を進みました。

家の間を縫うような、曲がりくねった道が続きました。ルウカーは角が来るたびに、辺りをキョロキョロと窺って進みました。

と、しばらくすると町の外れの森へと道は進み始めました。ルウカーはその道を通って家に帰れる自信はありませんでしたが、今更引き返しても、まだ子供達が居るかもしれないし、そうしたら苛められるに違いない、と思い、先に進みました。

森の中をソロソロと道は続きました。ルウカーはおっかない気持ちでいっぱいでしたが、先に進みました。

と、森が途切れて、ルウカーは開けた場所に出ました。そこはあの、花の咲かない島ポーチカでした。

「間違えて川の向こう側に来ちゃったんだわ」

ルウカーは焦りましたが、ふいに、何故この島には花が咲かないのか気になって、島の中を歩いてみる事にしました。

島にはたくさんさんの草木が生えていました。よく見ると、それはチユリツプや桜や勿忘草といった、春の花々でした。けれどそれらは皆、固いつぼみのままで、一つも咲こうという気配がありません。ルウカーが不思議に思いながら見ていると、

『誰？ 人間が何の用？』

という女性の声がありました。ルウカーが振り返ると、そこには淡い色の靄で出来た服を纏った女性が居ました。人間とは少し違う体で、ルウカーはその女性が絵本で見る妖精だと思いました。

「私はルウカー。貴方は？」

ルウカーが訪ねると、女性は億劫そうに答えました。

『私は花の妖精のヴィスナー』

「花の妖精？」

ルウカーはヴィスナーの言葉にドキドキしてきました。

「花の妖精って、何をするの？」

『花を咲かせるのが仕事よ』

「まあ、ステキ。私、花が大好きなの」

ルウカーは目をキラキラさせながら言いましたが、ヴィスナーはつまらなそうな顔をしていました。

『そう。あいにく、私は花を見た事が無いんだけどね』

「どうして？ ヴィスナーは花の妖精なんでしょう？」

ルウカーが尋ねると、ヴィスナーは言います。

『私はつい十年程前に生まれた新米でね。この島には私を含めて四人の花の妖精が住んでいるんだけど、誰にも花を咲かせる事が出来ないの』

「どうして？」

『花を咲かせる条件は判るんだけど、そのやり方を知らないの』

「誰か、先輩に聞くとか、出来ないの？」

『そんな事も知らないのかって、馬鹿にされちゃうわ』

「聞くは一瞬の恥、聞かぬは一生の恥って言うじゃない」

『言っは易し、ね』

ヴィスナーはそう言うのとそつぽをむいてしまいました。どうやら花の妖精というのは、見かけによらず頑固のようでした。

「判ったわ。じゃあ、私も花の咲かせ方を考えてみるから、教えて」
『人間なんかに出来るもんですか』

ヴィスナーは相手にしようとしませんでした。ルウカーがしつこく頼み続けると、やがて諦めてルウカーを手招きしました。ルウカーはヴィスナーについて行きました。

ヴィスナーの案内してくれた場所には、大きな木が生えていました。桜のようでしたが、やっぱり花はつぼみのままです。その木の太い根の上に、チヨコンと小さな壺が一つ、置いてありました。

『この壺には、咲水という魔法の水が入っているの。この水をかけると、つぼみは花開く事が出来るのよ』

「なあんだ、簡単じゃない」

『それが、そうでもないの』

ヴィスナーは溜息を吐いて言いました。

『この水はおるか、壺にさえ、触る事が出来ないのよ』

「まさか」

ルウカーは壺に触ろうとしました。ところがどうした事でしょう。

ルウカーの手は壺も、中に入っている水もすり抜けてしまいます。

『ほうら、ね』

ヴィスナーは肩を竦めて言いました。

『その壺も水も、手で触れる事は不可能なの』

だから、花を咲かせる事も出来ないわ。ヴィスナーは諦めたように俯いてしまいましたが、ルウカーは納得しませんでした。

「でも、他の花はちゃんと咲いているわ。どうにかしたら、水は花

「かけられるのよ」

『無理よ。きつと他の花は、違う方法で咲かせているんだわ。それ以外に考えられない』

　　ヴィスナーは言いましたが、ルウカーはある事に気付きました。そしてヴィスナーに言いました。

「ヴィスナー、ちょっとだけあつち向いてて」

『何よ』

「いいから、いいから」

　　ルウカーの言葉にヴィスナーは渋々、後ろに向きました。ルウカーはしばらくゴソゴソと何かをしていました。

「ヴィスナー、見て見て」

　　ルウカーの声にヴィスナーは振り返って、そして仰天しました。

　　そこには見事に花開いたチューリップが有ったのです。

『どうして？ どうやったの、ルウカー』

　　初めて見る花にヴィスナーが興奮して尋ねると、ルウカーはニッコリ笑って答えました。

「こつしたのよ」

　　ルウカーは地面に落ちていた細長い枯れ草を手にとりました。そして、その葉をザブンと壺に入れてしまいました。しばらくして持ち上げると、枯れ草には沢山の、虹色に光る咲水が付いていました。

　　手で触れないだけで、壺は桜の木の根に置いてあるんだもの。咲水とその壺は、植物にしか触れないのよ、きつと」

　　さあ、ヴィスナーも手伝って。この島を花でいっぱいにしなすよよよ。

　　ルウカーが言うと、ヴィスナーも枯れ草を手にとりました。咲水を振りまくと、今まで固かったつぼみがじんわりとほぐれて、花になりました。木々の花々はヴィスナーが宙を舞って咲かせました。ポーチカの一角は、春の花々で賑わいました。

『やったわ』

　　ヴィスナーは嬉しそうに言いました。

『これで私も、春の花々を咲かせる事が出来るわ』

ルウカーはその言葉に首を傾げました。

「あら？　じゃあ、ヴィスナーは春の花しか咲かせられないの？」

『ええ。私の知っている咲水はコレだけなの。この咲水は、春の花しか咲かせられないわ。他の季節の咲水は、他の妖精が隠し持っているはずよ』

「じゃあ、その妖精達にも、咲水の使い方を教えてあげましょうよ。そうしたら、このポーチカはいつでも花の咲く、ステキな島になるじゃない」

ルウカーは眼を輝かせて言いました。けれどヴィスナーは首を横に振ります。

『そんなのは、無理だわ』

「どうして？」

『他の連中は、嫌な奴ばかりなのよ。私の事も無視するし、話にもならないわよ』

ヴィスナーはそう言って諦めるよう説得してきましたが、ルウカーは頷きません。

「私、とりあえず他の妖精さんにも会ってみたいの。何処に居るのか教えてちょうだいよ」

ヴィスナーは乗り気ではありませんでしたが、ルウカーのおかげで長年の悩みが解決出来たのも確かでしたので、仕方無く、他の妖精の所へ案内しました。

島をしばらく歩くと、草原に辿り着きました。青々とした草の色は、夏の生気がみなぎっているようでした。

『この辺りは夏の草が生えるのよ。本当は実り豊かな一帯になるはずなの』

ヴィスナーはしばらく辺りを見渡して、

『あれがここの妖精よ』

と指差して言いました。

そこにはヴィスナーに良く似た女性が居ました。流水のように滑らかな髪と、真っ青な服を着た妖精で、岩に腰掛けて、じっと空を見上げていました。

「あの、すいません」

ルウカーは彼女に声をかけましたが、彼女はルウカーに見向きもしません。

「ほつら、ね」

ヴィスナーは溜息を吐いて言いました。

『とんだ無駄足だったでしょう』

ヴィスナーは帰ろうとしましたが、ルウカーは彼女を引き止めました。

「待って、もしかしたら気付いてないだけなのかもしれないわ」

ルウカーはもう少し夏の妖精に近寄ってみました。

「あのう、すいません。あのう……」

声をかけながら近付くと、ふとした瞬間、夏の妖精がルウカーの方を見ました。妖精が驚いた顔をするので、ルウカーは慌てて「ごめんなさい、怪しい者じゃないんです」と言いましたが、彼女は首を傾げるだけです。ルウカーは気付きました。

「ヴィスナー。この人、耳が聞こえてないんじゃないかしら？」

ルウカーの言葉にヴィスナーは驚きました。ヴィスナーはずっと、この妖精の事を自分を無視する嫌な奴だと思っていたのですから。

「試しに、筆談を試みましょうよ。妖精さんって、私達と同じ言葉が判るかしら？」

『人によっては、妖精語しか判らないかもしれないわ』

「じゃあ、話しかけてみてよ。書く物は……」

ルウカーはおつかいの画用紙と絵の具を取り出して、ヴィスナーに渡しました。ヴィスナーは絵の具をチューブから出して、落ちていた枯れ枝でツラツラと文字を書きました。ヴィスナーがそれを夏の妖精に見せると、彼女はヴィスナー達に近寄って、自分も画用紙に字を書き始めました。

「何て言ってるの？」

妖精語の読めないルウカーが尋ねると、ヴィスナーは答えませんでした。

「初めまして、私の名はリエータ。貴方達とお話が出来て、本当に嬉しいわ。……だって」

ルウカーはニッコリ笑ってリエータを見ました。リエータもとても愛らしい笑顔を浮かべていました。

リエータは生まれたばかりの時に、夏のうるさい蝉の鳴き声で耳を悪くしてしまったそうです。それで、一人で空を見上げていたのだと言いました。

ルウカーはヴィスナーに言葉を伝えて会話を続けました。

「夏の花を咲かせたくない？ 咲水の使い方が判ったから、リエータも夏の花を咲かせましょうよ。きつと綺麗よ」

するとリエータは大喜びで駆け出しました。ルウカーとヴィスナーは慌ててついて行きました。リエータの足取りは軽やかで、全身から歡びを発しているようでした。彼女は嬉しそうに跳びながら、壺の場所に案内してくれました。

そこには川が有りました。島の一角に少量の水が流れ込んで出来た小川の中に、壺が沈んでいました。

「大変」

ヴィスナーはビックリして言いました。

「普通の水に触れたら、咲水が流されちゃうわよ。さっきと同じようにはいかないわ」

ヴィスナーはすぐに落胆しましたが、ルウカーは試しに枯れ草を小川に入れてみました。流れは穏やかで、壺の中に草を入れる事は出来ました。けれど草を取り出してみると、水滴は虹色ではなく透明で、咲水は洗い流されてしまったようでした。

「ほうら、ね。無理なのよ。この島で夏の花を咲かせるのは、諦めましょう」

ヴィスナーは言いましたが、ルウカーは首を横に振ります。

「夏の花が咲いて、おいしい野菜や果物が作れるようになったら、きつとこの島は動物達の楽園になるわよ。ヴィスナーだって一人じやあ寂しいでしょう？ リエータもいっぱい友達が欲しいよね」

リエータは聞こえていないのでニコニコ笑んでいるだけでした。ヴィスナーはリエータがずっと一人で空を見上げていたのを知っていたので、少し気の毒になりました。もう少し早く、リエータの耳の事を気付いてあげたら、自分もリエータもあんなに寂しい思いをせずにすんだのだと思うと、なんだかやりきれない気持ちになりました。

けれど、川の中の壺を触る事は出来ませんし、かといってこのままでは咲水を取る事も出来ません。ヴィスナーは悩みましたが、答えは出ず、結局諦めてしまいました。

と、

「ねえヴィスナー。咲水は壺の中に溜まっているだけなの？」

ルウカーが地面を見て、何かを探しながら尋ねました。

「咲水は、その壺の中から自然に湧き出てくるのよ」

「じゃあ、ひっくり返っても大丈夫って事ね」

『どうするつもり？』

ヴィスナーが尋ねると、ルウカーは地面に落ちていた蔦を拾って言いました。

「壺を引き上げるのよ、蔦で」

ルウカー達は協力して蔦を結び上げ、長いロープのようにしました。ルウカーは小川に手を入れ、蔦を壺に巻きつけました。ヴィスナーとリエータは空から壺を引っ張りました。小川から壺が出され、地面に置かれました。慎重に蔦を操って、一度壺の中の水を捨てるのと、やがて壺の底から虹色の水が湧き出てきました。

「これでもう安心ね。夏になったら、さっきと同じやり方で咲水を撒けばいいのよ。リエータに教えてあげてね、ヴィスナー」

『もちろんよ。リエータ、夏になったら一緒に花を咲かせましょうね』

「ヴィスナーが紙にそう書くと、リエータは嬉しそうに笑んで、それ以外の時も仲良くしてね」と返事を書きました。

「さてと、今度は秋の花ね」

リエータと別れてしばらくすると、ルウカーが呟きました。ヴィスナーは嫌な顔をします。

「秋の奴は止めておいた方がいいわよ。アイツはいつも木の洞の中に入って歌ってばかりで、気味が悪いんだから」

「でも、秋を彩るのが紅葉だけじゃ寂しいわ。コスモスとか、見たいじゃない。それに、歌える人に悪い人は居ないわよ」

嫌がるヴィスナーを引つ張って、ルウカーは島の中を歩いて行きました。

しばらくすると、一面の果樹園に辿り着きました。梨や栗や柿：たくさんの果樹が、大きく成長し、佇んでいましたが、一つの花も実も有りません。

「この辺りにも、春の咲水を撒かないとね。梨の花は、春に咲くもの」

「本当だわ。良く見ていないから気付かなかった。後で撒かなきゃもうしばらく進むと、一際大きなクルミの木に辿り着きました。」

その根元には大きな大きな洞が有って、そこに妖精が座っていました。紅葉のような鮮やかな色の服を着た、フワフワの髪妖精で、歌を歌っていました。

「あの、すいません」

ルウカーが声をかけましたが、妖精は歌い続けています。

「ほうら、ね」

ヴィスナーは得意げに言いました。ルウカーは一度溜息を吐いて、「貴方は何ていう名前ですか？ 洞の中の妖精さん」と尋ねました。

「アタシの事かい？」

すると妖精は歌うのを止めて答えました。これにはルウカーもびっくりしました。洞の中の妖精は、更に早口で捲くし立てました。

「気付かなくてゴメンね、アタシはオースティニ。秋の花の妖精な
んだけど、生まれてすぐに見た紅葉が眩しすぎて、眼をやられちゃ
つてね。アレは綺麗だったね、アタシは今でも良く覚えてるよ。」

「ええと、それで。アタシは眼が見えなくてね、音を聞いて辺りを調
べているんだ。何せこの洞の中には、この辺りの色んな音が入って
くるものだから、うるさくってうるさくって、アタシがアタシに
声をかけてくれるのも判らなかつたよ、アッハッハ」

「オースティニは一息でそう言うと、洞の中から這い出て来て、地
面に座り込みました。」

「さあ、アンタ達の声が聞きやすくなつたよ。アンタ達は誰だい？
アタシに何か用かい？」

ルウカーもヴィスナーも、オースティニがあんまり良く喋るのに
驚いていましたが、やがて答えました。

「私はルウカー。人間よ」

「私は春の花の妖精、ヴィスナー。初めまして、オースティニ」
するとオースティニは嬉しそうに言いました。

「初めまして。アタシはもう、何年も鳥だの虫だのの下らない馬鹿
話に付き合わされて、ウンザリしてたトコなんだ。同じ妖精に会え
るなんて、とつても嬉しいよ。それで、どうしたってこんな所に来
たんだい？」

「私たち、咲水を探しているの。オースティニ、秋の咲水が何処に
有るのか、知ってる？」

「知っているも何も、アハハ」

「オースティニはおかしそうに笑って言いました。」

「その辺にやたら大きなカボチャが転がってないかい？ 秋の咲水
と壺は、その中さ」

「ええつ。それじゃあ、咲水を使うのは無理よ、ルウカー」

「どうして無理なの？ ヴィスナー」

ルウカーが尋ねると、ヴィスナーの代わりにオースティニが答え
ました。

「アタシら花の妖精は、植物に手を出しちゃいけないのさ。枯れ草やなんかならともかく、次の植物の赤ちゃんみたいなカボチャを割るなんて、不可能なんだよ」

「なあんだ。なら話は簡単ね」

ルウカーは笑ってそのカボチャを探しました。ヴィスナーもオースティニの手を引いてルウカーについて行きました。

カボチャは草むらの中に隠れていました。ルウカーと同じほどもあるつかという、大きな大きなカボチャでした。

「有った、有った。さあヴィスナー、このカボチャを運ぶわよ」

「運ぶって、何処に」

「いいからいいから。咲水が欲しいでしょう？ さあ、そっちを持つて」

ルウカーに言われてヴィスナーは渋々カボチャをルウカーと一緒に持ち上げました。カボチャはとても重くて、持ち上げるのも大変でした。

と、

「あっ」

ルウカーが情けない声を上げたかと思うと、カボチャはルウカーの手から滑り落ちて、地面に落ちて割れてしまいました。

カボチャの中からは、無傷の壺が顔をのぞかせています。

「あーあ、手が滑っちゃったなあー。割れちゃったけど、まあいいじゃない。カボチャって、種が有れば生えてくるようなものだしね」

ルウカーは悪びれた様子も無く言うつと、割れたカボチャを横に引っ張りました。破片を取り除いて、壺を取り出していきます。

「……ルウカー、わざとやったわね」

ヴィスナーが言いましたが、ルウカーは「でも壺が取り出せたじゃない」と笑って言いました。確かに壺は取り出せました。壺の中にはちやんと、咲水が溜まっていました。

「これで秋の花も大丈夫ね、ヴィスナー。リエータやオースティニと一緒に、秋に色を加えてね」

『判ったわ』

『秋が楽しみだね。アタシは花の声ってのを聞いた事が無いんだ』
オースティニは嬉しそうに言いました。

「さてと。じゃあ、冬の花の妖精も居るわけよね？」

オースティニを元の木の辺りまで連れて帰り、お別れをしてしばらくすると、ルウカーは言いました。その言葉にヴィスナーはギョツとします。

『それだけは本当に止めておこつよ、ルウカー』

「どうしてよ、ヴィスナー」

『他の奴らとはかく、冬の奴だけは絶対に無理。いくらルウカーでも、どうにもならないわ』

「だから、どうしてよ。やってみないと判らないでしょう」

『……そうね、ルウカーはやってみないと納得しないでしょうね』

ヴィスナーは説得するのを諦めて、冬の妖精の所へ向かいました。『冬は何処でも、どんな植物も自然には花を咲かせないわ。冬の花の妖精が何故存在するのも判らない。しかも、冬の妖精自身があるんな風だから、理由を聞く事も出来ないの』

ヴィスナーはルウカーを島の真ん中に有る、小高い丘に案内しました。そこには大岩が一つ有り、その下に空洞が出来ていて、その中に人影が見えました。

入ってみると、そこには氷で出来た女性像が有りました。美しい女性が、体を丸めて座っているのです。良く見るとそれはヴィスナー達、妖精と同じ外見をしていました。

「この人が、冬の花の妖精？」

『そうよ。ずっとずっと、氷のように固まっているの。だから咲水の場所を聞く事も出来ないわ』

ヴィスナーはそう言いました。ルウカーは試しに話しかけたり、目の前に手を翳したりしてみました。冬の妖精はピクリともしません。

『ほづら、ね』

ヴィスナーはそう言って諦めていました。ルウカーも今度ばかりはどうにも出来ず、手をこまねいていました。

第一、冬の花なんてルウカーも見ただ事ありません。本当に冬の妖精が咲水を持っているのかどうか、ルウカーも自信がありませんでした。

けれど、ルウカーは彼女がどうして凍っているのか疑問に思い、その体にそっと触れてみました。冬の妖精の体はヒンヤリとしていて、本当に氷のようでした。と、その冷たい指先から、声が電気のように流れ込んできました。

『貴方は誰……？』

ルウカーはビククリして彼女から手を離し、ヴィスナーを見ました。ヴィスナーは声が聞こえなかつたらしく、ルウカーの顔を不思議そうに見ています。ルウカーは恐る恐るもう一度妖精に触れて、心の中で声をかけてみました。

「あの……」

『ビククリした？ 貴方は誰？』

「私はルウカー。人間よ。貴方は？」

『私はズイマー。冬の花の妖精よ。生まれた時に、冬の寒さで凍り付いてしまって、それっきりここでこうしているのよ』

「じゃあ、咲水の事は知らないかしら。冬の花を咲かせるのに必要な水」

『知っているわよ。それは私の事なのよ』

ルウカーは驚きました。

「貴方が、咲水なの？」

『そうよ。私達冬の妖精は、皆こうして凍り付いて、自分の体を少しずつ溶かして、咲水の壺に注いでいくの。だから冬の咲水は、私自身なのよ』

「じゃあ、どうすれば冬の花を咲かせられるの？」

『夏のとても一日の長い日に、私の所に来るといいわ。きっと私の

髪が溶け出しているから、それを何かに受けて、冬になると空に撒けばいいわ。きっと白い花びらが、空からたくさん舞い降りるでしょう」

ルウカーはズイマーの言葉をヴィスナーに伝えました。ヴィスナーはそれを聞いて、「あっ」と気付きました。

『ルウカー、それはきつと、雪の事だわ』

「雪？」

『白くてフワフワした、氷の欠片の事よ。冬は花の代わりに、雪が世界を彩るんだわ』

「じゃあ、ズイマーの言うようにして、雪つてもものを降らせてくれる？」

『ええ。リエータと一緒にやってみるわ』

「それと、ズイマーに触つてあげてね。彼女もきつと寂しいはずよ」

『そうね。ああ、何だか今日だけでずいぶん、やる事が増えてしまつたわ。明日から大変ね』

そう言うヴィスナーは少し嬉しそうでした。

やがてルウカーはヴィスナーと別れ、家へと帰る事にしました。その道の途中、ルウカーは自分もつぼみなのだとしたら、咲かせるためには努力をしなくてはいけないのだと思いました。

家に着く頃にはもう、日が暮れかけていました。

「ただいま」

ルウカーが家に入ると、お母さんはプンプン怒っていました。

「こんなに遅くまで、何処で油を売っていたの！？ 心配するでしょう。それに、画材が無いとお母さんは仕事が出来ないのよ。どうしてもつと早く帰らなかつたの」

その言葉にルウカーはムツとして言い返しました。

「私は子供なんだから道草だってするわ。第一、画材が無くなってからおつかいを頼むのがいけないんじゃない。もう少し早めにおつ

かいを頼めば、お母さんだって焦る事も無いのに、それもしないで文句ばかり。全くどいつもこいつも、大人ってどうしてこうなのかしら」

普段言い返さないルウカーの珍しい反撃に、お母さんはビックリしてしまって、それ以上文句を言いませんでした。

「……そう言われてみれば、そうかもね」

お母さんはルウカーの言い分に納得したように頷いて、そして夕飯を用意しました。

次の日からルウカーは洋服を選んだり、髪を結ったり、挨拶や笑顔の練習をしたりしました。花開くためにたくさん準備を重ねました。

やがてルウカーは少しづつ成長していきました。そしていつも、町へと続く土手の道を歩きました。そんなルウカーの眼には、四季に合わせて色づくポーチカが見えました。

春には花が咲き誇り、夏には青々と茂り、秋には沢山の実を付け、動物達で賑わい、冬は静かに白く色づく島を見ながら、ルウカーは大人になっていきました。

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0753c/>

ルッカーとつぼみの島ポーチカ

2008年11月7日06時45分発行